ブルー 2

第１章　叛乱

emut

　女王ブルーは　ここまでジョーの話を聞いたところで、幕の外から大歓声が起こっているため、そろそろ剣士の祭りも終わりに近い事を知り、
　「ジョー、わたしは少し席を外しますが、第一師団の長　”ダン”　を呼んでおきましたから彼と暇な時間をつぶしておいて下さい。剣士の祭りを終わらせたら　すぐに戻って来ますから。」と女王ブルーは言い　幕の外に出ようとしたところ、

　ジョーが　ブルーの後ろ姿を見ながら、話した。
「ダーシアのことは　心配しなくてよいですから。我が国のことは私たち自身で処理します。今から起きることと、これからのことを、ブルー様がもどってきたら話をしましょう。私も昔の話ばかりして　一番大事な話を後回しにしたこと　申し訳ありませんでした。

　しかし　これだけは分かって下さい。私にとっては、いや　私たちにとっては　私が話した二人の思い出が　そして　私が命をかけて守ったことに間違いはなかったということ。」

ファイア

「女王様　私をどうかしようなど　つまらない事は考える必要はありません。子供の頃からそうですが、わたしは　この世で一番の　あなたのお味方ですから。
　そして　ここが一番大事な事です、今日の騎士の祭りの勝者は　ファイアという者です。この者は強い、私より強いかもしれない。そして　ファイアは私の一番の理解者です。・・・しかし　その逆かもしれない。その者に尋ねて下さい。ダーシアはどうなるのかと。」

後ろからのジョーの声を聞いていたブルーは、ジョーの方に体を向き直し、

「ファイアとは　どこの者ですか。」

「よくご存知でしょう、カーニ国の剣士です。」

「ああ、あの寝返りの者か。そうか　あの者を知っているのか。解った　戻ってきたら話しを聞こう。」

　ここまで話した時、第一師団の長ダンが入ってきた。
「女王様、そろそろ行かれた方が。後は私にお任せを、」と言ったところで　ダンの話すのを止め、ブルーは言った。

　「ダン　はなしは変わった。ジョーは仲間です。失礼が無きよう接するように！！」

　ブルーは　ジョーに何かしらの親しみを　感じて始めていた。三度も命を助けられ、それにその口から　この世で一番の味方であると言われた事で　信じようというより、信じたいという想いになってきていた。
　それに　カーニ国との闘いは　かなり激しいいくさであったが、それに終止符をうったのがこのカーニ国の最強の戦士であったファイアが　女王ブルーの方へ寝返ったことであった。

　ジョーはファイアにどこで知り合ったのか、それとファイアについては　いろいろ聞いてみたい事があった。何故か　ファイアは闘いが終わったあと、自分が裏切ったカーニ国に残ったのだ。女王ブルーの誘いに乗らずにだ。殺されるかもしれない自分が裏切った国の真っただ中にひとりで残ったのだから　其の当時みんな呆気にとられたものだった。

　ジョーは　属国ではあるがこれから敵国となる国のものではあるが　この我が国に寝返ったファイアという名が出たことから　ブルーは　これでジョーを信じられると確信した。

　そして　最後にジョーは話した

「ダーシアは　ご存知と思いますが、北の国と通じています。そして　北の国と密接な関係のある闇の組織の暗殺者を傭ったという噂を聞いています。　　十分気をつけるように！」

暗殺者エニ

女王ブルーの暗殺に　失敗したことを知らされたダーシア国の影（諜報機関）の長は　すぐに次の行動へと動いた。
誰も連れずに　ひとりで剣士の祭りの場所へと急ぎ　祭りが行われている闘技場のそばにある大きな木の下で立ち止まり、その場に座り込んだ。

　その時、大きな陰が彼を覆った。それに気づき　上を見あげると、かなり目立つ赤い衣類を着た大男が目の前に立っており　「エニだ」と太い声で言った。
　「おまえが　北の殺し屋か？」
　「そうだ」
それを聞いて　影の長は立ち上がり
　「目立つな　その服装は。着替えて来い！」と言い放つと　大男のエニは静かに言った。

　「馬鹿か　おまえは！　昔人が！（この”むかしびと”という言い方は北の地で未熟者という意味を持っているらしい。しかしこれの本当の意味は深いのである）」と言うより速く　服の中から剣を取り出し　影の長の懐に手を入れ袋を抜き取り、剣を突き刺した。しかし　その剣を影の長はかわし　大木の外へと飛び出した。その後ろ姿を見て　エニは薄い笑みを浮かべて　剣はそのまま木に突き刺したままで、エニはもう別の大剣を持っていた。そして　その大剣がスーッと消えた。その後で　ゆっくりとエニの腕が上がり影の長の背中を指差していた。

すると　その大剣は　もう影の長の背中を突き抜けていた。影の長は、自分はどうなって死んだのか理解できずに息が絶え、その場に倒れ込んだ、

　この騒ぎに気づいた闘技場を固めていた騎士の一部のものが　大木の方へと向かってきて　遺体を確認した。
　その騎士たちに向かって　エニは言った。
　「その男は、ダーシアの影の長だ。腕の入れ墨を見てみろ。」
そのことを騎士たちが確認した後　騎士の一人とエニは闘技場の方へと向かっていった。
入り口に居た騎士たちのリ–ダーが暗殺を企てたのがダーシアであると知らされており、遺体を調べることとして、エニには多少のことを尋ね、招待状を持っていたことから　すぐに解放し会場へと入れた。招待状は影の長から抜き取った袋に入っていたのである。

　このリーダーは　エニはただものではないと確信し　ラーシの影の者で腕の立つ５人に見張りを頼んだ。何にしろ　ダーシアの影の長を簡単に殺した男なのだから、上の者にも連絡をしておくこととした。

剣士の祭りは終わった

　女王ブルーが会場に入ったのは　まだ最後の闘いが行われているところで、闘技場は　湧き湧いて、熱気に包まれていた。
　ブルーは沸騰している会場に入ったところで一旦止まり、そしてゆっくりと進んで行った、ブルーはジョーが最後に言った北の暗殺者のことが気になっていたのである。
それと　不審な大男が会場に入り込んだという報告も受けていて、その周りは影の者で固めているという、その者はダーシアの影の長を軽く仕留めたらしい、恐ろしいほどの腕前である。この者が暗殺者なのか、どうしても見定めたかった。

　最後の闘いが見え、暗殺者と覚しき者が見える場所まで来たところで止まり、観察することとした。

　観客席に居る不審な大男はすぐに　それと確認できた、かなりな大男で　派手な身なりをしていたので　その辺りでは浮き上がって見えたのである。そして剣士の祭りの最後の闘いに目を向けると　目を離せなくなてしまった。

剣士の祭りは終わった

その最後の勝者を決める闘いは　ラーシ国最強の剣士ラショと、ジョーが勝者になると言ったカーニ国のファイアとすぐに分かった。
　ラショは　よく知っているので兜をかぶっていてもすぐ分かったが、このファイアもすぐに分かった、それは何故かファイアは兜を被っていなかったので　その顔を確認できたのである。ファイアの顔は　ラーシ国との戦で寝返ってきた時に近くで対面したため、ブルーは　よく覚えていた。

　ブルーには　ファイアはラショの剣を避けるだけで　攻撃が出来ないでいるように見えた。しかし　ファイアは女王ブルーが来ているのを知ったときから　その凄さの片鱗を見せた、それはブルーと目が合い　笑みを浮かべたそのあと　素早い動きで剣をラショの剣の下に持って行き、その剣を振り払って　ラショの首元へと剣を突当て、あっという間にラショを降伏させた。

　この一連の動きは　近くで見ていた審判者たちでさえ、よく見えていなかった、しかし気付いた時には　ラショはすでに負けていたのである。観客席は　どのようにして負けたのか分からないまま、ラーシアいちと思われていた剣士の敗北に落胆の声で包まれた。

剣士の祭りは終わった

　最後の勝者が決まったことで　女王ブルーは剣士の祭りを早く終わらせようと思い、すぐさま会場へと進み出た。
そして　勝者のファイアへ大いなる賛辞を送り、負けたとはいえ最後まで残った自国の剣士ラショにねぎらいの口づけを　その者の頬に与えた。ラショはすぐに跪き　女王の手に忠誠と感謝の口付けを行った。そして勝者への賞金の贈呈等、祭りの最後の式次第を滞りなく行った。

　「これで剣士の祭りの幕を閉めます。観客の皆様　招待者の皆様　この最後の勝者ファイアへの盛大なる拍手を与えながら　心残りではありましょうが、お帰りをお願いいたします。では閉会いたします！！」

　この言葉で　観客たちは一斉に席を立ち　大きな拍手をしながら、会場の外へと出て行ったのだった。

　この観客たちが立ち去るざわめきの中で、女王ブルーはファイアと静かに話しをしていた。

　観客たちが帰るのを見送るブルーは、ファイアと話した。
「あの時、なぜ自分の国を裏切ったのです　？」
「なぜ？　それは　あんたの方が　よく分かっているはずだ。私の実力は分かっていたはず。」

「そう、分かってはいます。それと　あんたと言う言い方は止めてくれないですか。
そう、あの時ファイア、あなたががいるカーニ国と我がラーシ国が戦っていれば　両国とも大変なことになっていたでしょうね。」

「そう大変なことにね、ブルー様、それを分かっていて攻めて来た。そこですよ、そこにブルー様の本気を見ましたよ。そして未来をね。そして、このファイアの考える想像を絶する未来をね。それで裏切る、いや　貴方と手を結ぶ決意をしたということです。
　それと、カーニ国の昔を、歴史を知っていると思いますが、その忌まわしい歴史を潰したのは　私ですよ。このことは知らなかったでしょう。

　このことは、外部には出せなかった極秘のことでしたからね。其の為、一部の者からは慕われてもいます。そのこともあるということです。」

ファイアのおもい

ファイアが幼い頃のカーニ国は　前王の施政のときで、三つの悪魔的なまつりごとを行い全国民強兵を進めていた。
　ひとつは　全国民の子供を五歳になったら　男女とも　全寮制の兵役として、親から離すこととし、幼いときから　あらゆる面で洗脳していくのである。
　ふたつは、下級兵は男女ともに６０になったら、年一回サバイバル決闘をさせ、強い者だけに生き残ることを許した。
　下級の者には　結婚することを許さなかった。こころとからだは別物として　子供のときから　結婚の無意味さを説き　これを徹底した。しかし上級の者には複数の女性を娶ることを許した。

　このような体制のなかで、子供たちには　強くなることを強制し、強くすることを名目として　弱い者への集団暴行的なことも許していた。このことで亡くなる子供たちも少なくなかった。

　ファイアも　五歳の時、この兵役の中に入り　同い年の友を得たが、この友は弱かった。七歳になったあるとき、この弱さのため　この友が集団暴行を受けていた。

　それを知ったファイアは　すぐにその場に駆けつけ、その友を助けるため　集団暴行していた２０人くらいの者たちに向かっていった。なんと！　ファイアは自分でも信じられないぐらいの体の動きで　一撃ずつで　あっという間に全員を　倒してしまった。

　これを見ていた上の者たちが剣を持って、ファイアに向かっていった。ファイアはこの者たちの剣を　すばやくかわして　全員を難なく倒していった。この剣で挑んできた者たちもファイアの敵では無かった。

　この事件をきっかけとして　この時を境に、ファイアの周りから、ファイアを中心として　ファイアが規律となっていったのである。
　そして　ファイアが若者になった時、悪魔の施政をなくすために　この悪法を作った王を　失脚させたのだった。

　ファイアは　この七才の事件の時に　大きな変化のひとつを受けることとなった。こころと体は別物ではなく、自分という者は　こころと体の結び方によって、凄いことになるのだ、ということを確信した。

　そして今は　愛というものが　もうひとつの大きな何かを持っていることを確信していた、それは　２５の時　人には言えない自分とは何者かという命題が　解決したことが関係していた。その後に結婚し、子供もひとり女の子を持つこととなった。

「それと　後で分かったことだが、このわが国の前王に　悪魔の施政を行わせたのは　北の闇の組織ということだった。それで、おれとジョーは　ここで一致したというわけだ。」

ジョーの想い

「なるほど　そういうことですか、それとあなたの考える想像を絶する未来とやら　想像することとして、あとひとつ聞きたいことが、あなたが知っている限りで　ダーシアの夜導師ジョーは　一体何を考えていると思いますか。」

「彼　ジョーの頭の中の中心を陣取っているのは　あなた様　ブルー女王さまです。彼奴は　あなた様にぞっこんです、あなた様を心底愛している。」

　ブルーは　このジョーに愛されているということは　考えてもいなかったので、かなり驚いた。何かの大きな野望を持っている若者であろうと思っていたのである。

「それは驚いたわ、愛されているというのは　誰からであれ　悪い気はしないから良いのですが、なぜ　そのことを今あなたから　聞かされなくてはならないのですか。」

「そのことを　私が今　何故言ったのか　それはブルー様が考えて下さい。
その想いのため　あなた様にとって危険と思われることは除いていこうと、そして助けて行こうと考えています。

　それで　今回の暗殺を阻止することと、それと同時に　あることを成すことのための計画を進めています。それは　ダーシア国での反乱です。」

「反乱！？」
「そう彼は　一応　前王の血を持っているので　王になる資格はあるんですよ。それに資質が加わり、正義があれば　それは現実味が帯びてくる。
実は　軍の師団長クラスのほとんどの者は　北の地に行き　ジョーとは面識があり　あちらでは　いろんなことで　少なからず世話になっている。

女王様も覚えているでしょう。彼は幼いにも関わらず、大人顔負けの行動をとったことを。たぶんジョーから直接聞いているとは思いますが、二度もの暗殺を阻止したのですからね。このことから推測できるでしょう。北の地に行った者たちが、ジョーをどう思ったか。ただ者ではないとの思いは消えなかったと。

それにしても、あなたが、今は亡き兄上に毒殺されそうになった時、ジョーは代わりに　その毒を飲み倒れ　北の地へ。　そしてジョーを連れて行った者の中の三人は凄かったらしい。この三人は今もジョーのそばで働いているが、いい男たちだ。この三人の能力が　この反乱の成就をかなり左右するというか。もう成功したと言ってもいい。

俺にも　このような者たちがいたらと思うことがある。これだけはうらやましい。」

そして　ファイアは話し続けた。
「その後　彼は北の地で育ち、そこで大きな過ちを犯した、一番大事な友を裏切るという過ちを、今思えば　非常にいやらしい裏切りでした。そのことをジョーは今でも非常に悔いている。そして　そのことと同じくして　北の地での闇の組織の活動が活発になってきたらしい。
　北の地とダーシアが繋がっているのを考えると　この反乱は意味があるものとも。
　ブルー様も北の地には興味があるはず、この反乱は　もう決行されているはずです。
今では　彼に組する者は　軍のほとんどです、たぶん途中で帰途についたダーシア国王も自分の国に入れてもらえてないことでしょう。」

　ここまで話したとき、何か言葉で言い表せないような暗い異様な雰囲気が暗殺者エニの方から発せられた。

　ブルーは　ジョーの望みが自分との結婚ということを聞いて唖然とし、それに反乱の企てといい、ジョーとは？
このエニの動きではあったが、それどころではないということが　ブルーの頭の中を駆け巡っていた。

　しかし、そのようなブルーの頭の中を一瞬にして凍らせる出来事がエニに起こっていた。

浮体と浮心　そして浮峰

　エニが浮き上がったのである、もう暗くなりつつあった空の中へと。
「何なのだ　これは」
「信じてはいなかったとは思いますが　聞いたことはあるでしょう。これが浮体というやつです。此奴は　多分　浮くだけではなく浮心も出来ることでしょう。」

ここまでの技を持っていたとは、と　ファイアは思いながら　静かな口調で話した。
浮心とは　飛んで攻撃も出来ることを言うらしい。浮体だけなら、逃げる時使うものだが、エニは女王ブルーの暗殺に来ているのであるから、当然　浮心も出来ると考えた方がいいということだ。

ファイアは、浮の技の最高の技であるという浮峰を使ってこなかったことで　安心していた。浮峰の技は　訳あって使わなかったのか、使えないのかは分からないが　とりあえず　ファイアは安心した。

　この浮峰は　一度だけ見たことがあったのである。これは悪魔の技としかファイアには思えなかった。この技は自分の触る物も一緒に　浮き上がらせることが出来、それを敵の上まで持って行き　そこで落とし攻撃するというものだ。

その浮き上がらせることが出来るものが　今考えても信じられないものだった。その時見たものは　大きな城ひとつ分くらいの、なんと大きな大きな岩の塊であった。

そんなものを落とされた　下にいた大勢の兵士たちはひとたまりも無かった、すべての者が　一瞬のうちにその岩に潰され、後に残されたのは　大きな岩と粉塵の霧であった。

悪魔的な浮峰ではあるが、その時　見たところでは　そんなに早くは進めないようであった。そのため急襲しなければ　失敗する可能性がある見ていた。ここでは　もう無理があると。このことから、ファイアは自分にも勝ち目があると　確信を持っていた。

　ほとんどの者が去ったこの闘技場には、女王ブルーたちがいるこの一角、ジョーがいる幕の他、観客席の方の暗殺者エニとその周りに潜んでいたラーシ国の影の者たちのみがいるだけである。

そして　女王ブルーたちの一角には　１０傑に入った他国の剣士たちも　この成り行きに命令があれば　という体の静かな佇まいをみせている。

　しばしの沈黙の後　ファイアが口を開いた。
「ブルー様　あの者は私に任せて下さい、今のブルー様では　勝てる相手ではない。ここで、あの者と闘えるのは　私だけです。勝つことは出来ないが　諦めさせることは出来ます。それに　ジョーと私で共に闘えば　勝つことは出来ますが　そこまでの時間はないものと。
　それより、この機会を利用して　属国との結束を高めましょう。属国の剣士も来ておるので良い機会です。
　それと　ジョーとブルー様は　次の段階へ早く上がるのが　最良かと思います。」

「ジョーのもとへ　早く行って下さい、そして話し合って下さい。後のことは　わたしに、　お任せを！

　ジョーのために　ブルー様にはこんなところで死んでもらっては困る。あの北の暗殺者が　貴方に向かってきたら　私ではブルー様を守ることは出来ません、ジョーではないので　自分を犠牲にしてまで守ることは出来ない。」